

---

# 時間旅行 ～ 1970 ～

布留川チビコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時間旅行〜1970〜

### 【Nコード】

N1747F

### 【作者名】

布留川チビコ

### 【あらすじ】

うつすゝい記憶を辿りながらのエッセーです

## 有線電話あります

「もしもし、206番の　さん、お願いします」

：1970年半ば、私が生まれた育った農村の唯一の通信網は、農協のお姉さんが交換に応じる

「有線電話」

だった。見た目はいわゆる

「黒電話」

ではあるのだけど、1から0までのダイヤルがなく、音量のつまみがある位で、呼び出しを受けると電話のどの部分からか忘れてしまったが

「　番××さん」

と声がしていたと思う。

親たちの話だと、受話器を取らなくても使用中の人たちの会話が聞こえていたというのだから、プライバシーなど地域ぐるみで筒抜けだっただろう。

しかも回線自体が少ないので、長話禁止は暗黙の了解であつたらしい。

私が小学校に上がる77年頃には電電公社の光沢のある黒電話に切り替わり、役目を終えた有線電話は他の道具がそうだったように、納屋の奥に身を沈めることになるのである。

混線電話中です(前書き)

前回に引き続き、電話にまつわるエピソード

## 混線電話中です

「もしもし、もしもし、そこにいるんなら受話器取ってよ。喋ってる声、聞こえてるんだから。」

1980年代。友人の家に電話をすれども相手は出ない。にも関わらず受話器の向こうからは、かすかに誰かが話している声がする……まだ子供だった私は、相手の家の電話機がその家の音を拾っているものだと思い込み、前述のような苛立ちを受話器に向かってぶつけていたのである。それが

「混線電話」だと知ったのはかなり後のことである。仕組みは未だに分かっていないが、混線電話を通じて恋に落ちるといった内容の少女漫画があったような記憶があるので（かなりいい加減な記憶ではある）当時は頻繁に見られた現象だったのだろう。

いつ頃までにこうした現象が解消されたのかは定かではないが、90年代初め、一人暮らしを始めた頃、引越したばかりの部屋で面白半分電話線をモジュラージャックにつないで実家にかけて、

「ピーッ」だか

「ジーッ」だか凄まじい音の後にすんなり繋がってびっくりしたことがある。回線申し込みをする前だったのでノイズこそひどかったが、それでも繋がったのである。それが90年代初めの頃。

今なら悪いことに応用されちゃいそうなのが結構平気に、緩やかに起きていたのだ。

何気に21世紀を生きているが、技術の進歩は地味々に確実に進んでいる。

ところで、混線電話の向こう側と話が出来るのかどうかだが……こち

らの声に気付かれた記憶はないので、少女漫画のような展開はありえないのではないかと思われる。また会話の内容もはっきり分かるほどではなかったので、相手を推測するのも不可能だったのではないだろうか。

進んだ技術が元に戻ることはないだろうが、ほんの少し時を戻して検証してみたい、そんな欲求を今感じていたりするのだった。

## シバラクオマチクダサイ（前書き）

「しばらくお待ち下さい」のテレビ画面を見たことがありますか？

## シバラクオマチクダサイ

「おかーさん、テレビがまたシバラクオマチクダサイになったよ」

どう見ても下手クソな絵に

「しばらくおまち下さい」の文字。これが画面に現れると、そこから軽く30分は復旧しない……

それが70年代、とある地方のテレビ局で乱発していた現象である。

今なら放送事故で2ちゃんねるあたりで祭りになること間違いなしの出来事が、実に日常的に起こっていたのだ。どうかすると1時間近く止まったつきり

「しばらくおまちください」

の絵だけが虚しく映っているのだ。後期になるとテレビ局も学習したのか、どこかの風景を流したり、バックにBGMを入れたりしていたが。

大体、忘れた頃には復旧しているのだが、復旧後の次の番組までのつなぎには、必ずと言っていいほど

「もーれつア太郎」

が15分だけ放送されるのだ。もちろん、新聞のテレビ欄には載っていない。

というより、

「もーれつア太郎」

を15分バージョン以外で見た記憶が私にはない。

あらかじめ事故対応のため、15分ぶんだけ放送できるように編集していたのだろうか？にしても事故を取り繕うのに何故

「ア太郎」なのか？

今となってはどうでもいいことだが、今よりずっとおおらかでいい



加減な時代であつたように思える。

いや、単に田舎であるほど機材や技術にかかる予算が少なかったのかも知れない。何しろ夕方に放送されていたコマーシャルの多くが、静止画に音声がついただけの代物だったのだから。

でもそのような貧しい状態であつてこそ、人はノスタルジーに浸れるのだ…

## カラーテレビがやって来た！

我が家に初めてカラーテレビが来たのは1973年頃。父が月賦で買った日立の

「キドカラー」だった。

赤い羽根に黄色いくちばし、青い服の日立のキャラクター「ポンパ君」の指人形が二つ、私の遊び道具としてあったのが、これは電器屋さんが持って来てくれたオマケだったのだろう。

自宅で生まれて以来、テレビにお守りをして貰っていた私だが、残念ながら白黒テレビで見ていた番組の記憶がない。ただ、覚えているのは、電源ボタンを引く張つても、今の薄型テレビ以上に画面が現れるのがめっちゃめっちゃ遅かったこと、画面が出なくても音声だけは出ていたこと、ディスプレイの後ろ側に真空管がボコッと出ていたこと……くらいである。

余談だが、70年以前からカラー放送は既に始まっていた。我が家のカラーテレビデビューは、遅いほうである。一般的には70年前半までにはかなりの家庭がカラーになっていたのではなからうか。にもかかわらず、新聞のラテ欄にわざわざ「カラー」という文字があった記憶があるということは、筆者が小学校に上がる70年代半ば位まで、白黒番組が残っていたということだろうが。

さて、我が家に来た「キドカラー」であるが、電源スイッチと音量ボタンを兼ねたつまみにVHFのつまみ、そしてUHFのダイヤル以外に、何故か「カラーと白黒を切り替えるボタン」が2つ付いていた。カラーテレビで何故わざわざ白黒に切り替えなければならぬのか？当時小学生だった兄の答えは、

「カラーは目に悪いから、たまに白黒で見て目を休ませるため」

という実に不可解なものだった。恐らくは白黒番組をより白黒で見るためのボタンだとは思うのだが、どれほどの必要があったのか、可能であるのなら日立の人に聞いてみたいものである。

あの当時はまだ、リモコン付きのテレビはなかったはずだが、裕福な農家に行くと当時の一般的なダイヤル式（がちゃがちゃ回すタイプ）ではなくて、1から確か12までのボタンがディスプレイの右側に付いたテレビが置いてあったりした。ついでに子ども部屋に赤いテレビが置いてあったりすると、もうたまらなくうらやましかったものである。

あれから35年あまり、つい最近薄型テレビを買うまで、計3台のブラウン管テレビが我が実家にやってきては花瓶を置かれたり、時には叩かれながらも、その寿命の尽きるまで（叩いても起動しなくなるまで）任務を全うしてくれた。有難い道具たちであったのに、礼の一つも言っていなかった。

たまには、目の前のテレビに労りの言葉をかけてみようと、改めて思っていたりする筆者である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1747f/>

---

時間旅行～1970～

2010年10月21日23時36分発行